



TITLE:

朝鮮蘭谷産十字石に就いて

AUTHOR(S):

田久保, 實太郎

---

CITATION:

田久保, 實太郎. 朝鮮蘭谷産十字石に就いて. 地球 1937, 27(4): 254-256

ISSUE DATE:

1937-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184678>

RIGHT:

## 朝鮮蘭谷產十字石に就いて

田久保實太郎

本試料は昭和十一年朝鮮江原道淮陽郡蘭谷面下松館里に於て、朝鮮總督府地質調査所木野崎技師の採集に係る中村先生所藏の十字石柘榴石雲母片岩中から採取したものである。同地方の片岩中に十字石を産することは既に朝鮮鑛物誌の中にも記載されてゐる所で、尤より新しいことではないが右標品中からは大小多數の雙晶が得られるので茲にそれに就いて觀察した所及化學分析の結果を簡單に報告する。

本標品に就いて見るに第一圖に示す如く、柘榴石十字石の結晶が、同片岩の片理面に沿うて極めて多數密集して存在する。

柘榴石は徑一耗内外の大きさのもので、紅色を呈し偏菱形二十四面體の美晶をなす。十字石

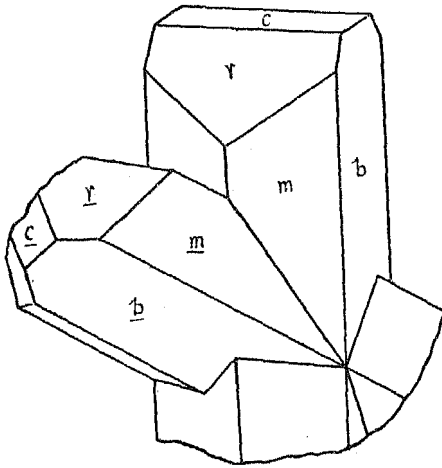
第一圖



は長さ時に一耗以上にも及び結晶面  $m(110)$   $b(010)$ ,  $r(101)$  及  $c(001)$  から成り嘗て平安南

道江西郡斑石面沙川市に於て十字石藍晶石雲母片麻岩崩積地から採集したものと同癖である。(地球二十六卷參照)然し沙川市産のものは何れも單晶で外形上雙晶は見當らなかつたのであるが、本標品中の十字石は大小殆ど全部が雙晶で而も同様に(288)を雙晶面とする雙晶をなす。

第二圖



面角を測定した結果は次の通りである。

朝鮮蘭谷産十字石に就いて

$m(110) \wedge b(010) = 64^\circ 46.5'$   
 $m(110) \wedge m'(1\bar{1}0) = 50^\circ 27.5'$   
 尙雙晶面指數を計算するために雙晶をなす二個の結晶個體例へばA及Bの各の結晶面に就いて雙晶面に對して對稱的關係にあるAの結晶面とBの結晶面との角を測定した。測定値は次の通りである。

$$A \cap (010) \wedge B \cap (0\bar{1}0) = 123^\circ 36'$$

$$A \cap (1\bar{1}0) \wedge B \cap (110) = 128^\circ 32'$$

従つて雙晶面と(010)及(110)面との面角はそれぞれ  $61^\circ 48'$  及  $64^\circ 16'$  である。今平射投影圖上(第三圖參照)に(010)面から  $61^\circ 48'$  及  $(110)$  面から  $64^\circ 16'$  の等角距離を描けば其の交點は雙晶面極の投影に相當する。雙晶面極と結晶軸  $a, b$  及  $c$  極との間の角  $\mu, \nu$  及  $\lambda$  中  $\mu$  及  $\nu$  を投影圖上で測り次の値を得た。

$$\mu = 57.6^\circ$$

$$\nu = 45^\circ$$

$$\lambda = 61^\circ 48'$$

